

ヨコハマ映画祭

映画ファンのための熱いまつり

鈴木たけし

- 一——はじめに
- 二——横浜という街の映画状況
- 三——ヨコハマ映画祭の足跡
- 四——おわりに

一——はじめに

ボクは生まれてこのかた三〇年以上、磯子に住んでいるのだが、今から一〇数年前、自分の住む街から映画館がなくなった。

子供のころには、家から歩いて行ける距離に三つの映画館があった。三館ともいわゆる二番館、三番館と称するコヤで、低料金で三本立ての映画を見せてくれていた。だから、わざわざ伊勢佐木町や横浜駅周辺の封切館へ行かなくても、しばらく待っていれば、自分の街の映画館でたいていの映画は見れた。テレビがまだ普及していない頃はもちろん、テレビが全盛となり映画が興業的に衰退していった時代にも、ボク

にとつて映画は何より大切な宝物であり、やすく厳しい人生の師であり、色々と悪いことをひそやかに教えてくれる不良仲間でもあった。そして、自分の街に映画館があった——。

ところが、時の移ろいとともに、ひとつ消えふたつ消え最後に残った一館も消えた。これは大変ショックであった。

この辺のニュアンスがうまくお伝えできているか自信がないので、もう少し映画とのかかわりについて記させていたたく。

ボクは映画に関しては、全くのアマチュアである。本職はしがないサラリーマンである。だから身銭を切って、好きな映画を選んで見る。学生時代は年間四〇〇本ぐらい見ていたが、今

はその半分ぐらいがせいぜいだ。しかし、今でも一〇日も映画を見ない日が続くと、かなり精神的なストレスがたまってくる。テレビでは代替にならない。一種の中毒患者みたいなもので、もうこの禁断症状から逃がれる術は、一生ないのではないかと覚悟している。

「映画館が学校だった」とか「映画がボクたちを作った」なんて言葉があるが、正に良くも悪くも今のボクを形成している大きな要因に映画がなっていることだけは間違いない。そしてそんな映画を見るについては、どこの映画館で見るかということも大きな要素となる。すなわち、自分のホームグラウンドといえる映画館が必須なのだ。

それがボクにとつては、自分の街の映画館なのであった。——そうした映画館がなくなった。この時の寂しさは、正に肉親の死に直面したような感情であった。オーバーな、と笑われるかも知れぬが、正直な気持ちなのだ。

このような体験を基に、ボクは「自分の街」を、磯子という街から横浜の地域に拡大して、その映画状況を考へてみるようになったのであった。

二——横浜という街の映画状況

わが街横浜は、東京という超大型都市に近接しているために、各種の文化面で氣勢があがらないとの指摘がよくなされるが、それは映画において例外でない。

世界の映画は今、大変多様化してきている。ひと昔前の映画といえば、欧米の先進諸国のものだけ注目していれば事足りたものだが、今はそれこそありとあらゆる国から様々な才能が続々と輩出してきて、大変面白い状況となっている。

日本映画の方でも、大手映画会社の支配体制がくずれ、自主映画や独立プロなどから若い有為な人材がどんどん優秀な映画を生み出している。

こうした大きな流れの中で映画も、大資本が大量の資金を投入して作る大型娯楽作品と、金はさほどかけられないが作家が思いのたけだけは十全にささやきかけようとする非商業的映画に二極化してきている。

これに対応し、東京あたりでは商業ベースに乗りにくい世界各国の地味な秀作を紹介するミニ・シアターが全盛で、興業的にもバラエティに富んだ多様さを呈している。

そこで横浜はというと、そうした多様さに全く対応しきれないのが、偽らざる現状だ。もちろん、鳴り物入りの大作、娯楽作などは東京と同じように公開されるが、非商業的で地味な、しかし映画ファンにとって決してなおざりに出来ない世界各国の秀作は、ほとんど素通りしてしまふのだ。そうした意味では、なまじの地方文化都市より遅れているとの指摘もある。人口では大阪を抜いて全国第二位の大都市の、これが悲しい現状である。

横浜の映画ファンは、もうそうした映画は東京で見ると決めつけている。一方、映画館側は、たまにそうした映画を上映してもサツパリ客が集まらない。横浜には映画好きがいないのでは、と嘆く。また、映画配給会社の方は、東京で上映すれば京浜地区の公開はすんだとして地方へフィルムを流してしまふ……とこうし

た要因が重なり合って、横浜の映画状況の後進性が生じているわけだ。

古くはオデロン座などで、全国に先がけて先行ロードショーがなされた映画先進地、横浜。東京からファンが映画見物に訪れたという実績のある街だ。

そんな横浜の映画状況が、今のようであつていいはずがないのだ。誰もやる人がいないのなら、我々観客（市民）が行動を起こし、不幸な状況を打破するキツカケを作っていくしかない……。そこから、ヨコハマ映画祭の発想は生まれた。

さらに、権威と伝統で支えられている既成の映画賞に対し、そこからハミ出してしまふかけがえない部分を若い感覚ですくいとりたいたい願ひ——、素晴らしい仕事をなした映画人と映画ファンが交流しあう出合いの場をとりもちたいという願ひ——、そんな希求からヨコハマ映画祭は発した。既成の権威に追従せずに、若い映画好きの人たちの純粹な投票によって優れた作品を作った映画人を称え、映画を愛する人同士のつながりを深めようとの趣旨を根幹に持つのだ。

三——ヨコハマ映画祭の足跡

①第一、二回映画祭

ヨコハマ映画祭を始めて、六年が経った。たった三人の映画好きの青年が語らいスタートした小さな小さな映画祭も、もう六歳となり、「全国でも有数のシネマイイベント」（神奈川県新聞）とか、「映画界にとってかけがえのない存在」（アングル誌）などと言ってもらえるように成長してきた。もちろん、そのような評価は過褒のそしりをまぬがれないのだが、映画という貴重な文化を、これ以上衰退させてはならぬとする映画関係者や映画ファンの切ない意思が、この映画祭をここまで育てて下さったということを、強く感じないわけにはいかない。（ちなみに昭和三十三年のピーク時に一一億三、〇〇〇万人弱あった年間映画人口は、去年の昭和五十九年には一億五、〇〇〇万人強と、約七分の一まで減少している）

ここで、この六年間の映画祭の歩みをおおまかに振り返ってみよう。

この映画祭の構想をいだいたボクは、映画仲間H、Uの二人に相談した。二人からは即座に「やろう」との返事が返ってきた。開催までの膨大な手間隙、予想される多額の赤字、映画界内部にコネのないことから生じる困難……その辺をザックバラに話した上での返事であっただけに、嬉しかった。

次は会場探しだった。これについては出来れば我々のホームグラウンドのような映画館で開催したいというのが、強い希望であった。ところが、そうした条件にかなう良心的名画座といえ、横浜中でも当時鶴見にあった京浜映画劇場しかないのは明白だった。

早速、京浜映画劇場に話を持ちかけると、社長も支配人も大変乗ってくれ、トントン拍子に事は進んでいった。

様々な紆余曲折を重ねながらも、トータル的には順調に準備が進行していた。スタッフは、我々の映画仲間や、京浜映画に支配人を慕って集まっていた若者たちが中心となり、組織された。選考委員は、熱狂的映画ファンや若手映画評論家など約三〇人で構成し、この人たちの投票によって、その年の日本映画の各個人賞（監督賞、主演男女優賞、新人賞など一一部門）と作品ベストテンを選考し、その結果をもとに、個人賞の表彰式およびベストテン入選作教本の上映を行うという映画祭の骨子も決まった。

マスコミもこの素人主催の映画祭に対しては好意的で、新聞や情報誌など準備段階から色々取りあげてくれ、主催者は問い合わせの殺到に嬉しい悲鳴をあげた。

資金面はちよつと問題だった。会場が狭い（定員二八〇人）ことから、超満員になつても

五〇万円程度の赤字は避けられなかった。スポンサーを取ってこれをカバーすることは、全く考えもしなかった。劇場側が一部を面倒みられることになったので、あとはボクとH君で負担する事にした。この映画祭は、映画ファンの心意気のまつりなのだ。好きなことを好きなようにするのに、多少のリスクはつきものだど割り切った。

第一回ヨコハマ映画祭は、昭和五十五年二月三日日曜日、京浜映画劇場にて開催された。切符は一週間前に完売、通路まで立ち見客でぎっしり埋まる盛況だった。取材もNHKテレビをはじめ、テレビ・ラジオ・新聞の各社が駆けつけた。

まずは「手作り映画祭大成功」（朝日新聞）だったが、あとで観客のアンケートをまとめてみると、横浜在住の方より東京から参加してくれたファンの方が多かった。これはちよつとショックであった。いくら鶴見という立地条件があるとはいえ、ヨコハマ映画祭と名乗るイベントに東京の人間が集まる、この皮肉。改めて、横浜の映画状況の後進性という問題について、深く考えないわけにはいかなかった。

第二回の映画祭も、前回と同じ京浜映画劇場を会場に翌五十六年の二月、今度は前夜祭も含めて二日間のイベントとして開催された。



この年は受賞者の中に、松田優作、葉師丸ひろ子、荻野目慶子、風間杜夫などアイドル性の強い俳優さんたちが揃っており、特に葉師丸ひろ子の警備で実行委員はすべての神経をすり減らしたような記憶がある。作品賞に輝き、この年の映画賞を総ナメにした鈴木清順監督「ツイゴイネルワイゼン」の横浜初上映は、横浜の映画ファンの中で大きな反響を呼び、まだ東京からの参加者の方が多かったが、だいぶ横浜のフ

ァンの比率が増えてきた。(第一回でも、柳町光男監督「十九歳の地図」も県下初公開で、以降これが映画祭のひとつの名物となった)

こうして映画祭が我々の想像以上に評判になるにつれて、劇場側からは多くの参加者を毎回断るのは忍びない、次回からはもっと大きな会場で開催し、ファンの希求を満たし多額の赤字を解消する方向へ持っていったらどうか、という意見具申があった。しかし、やはりスタート時に物心両面で世話になった京浜映画劇場を二回程度の成功で出ていくのは、いかにも心苦しく我々は悩んだ。

②—第三回映画祭

第二回目の映画祭を終えて数カ月後、突然、京浜映画劇場が三〇年の歴史にピリオドを打ち閉館になってしまった。複雑な事情がからんでいたのだが、横浜の映画ファンが心の拠り所としていた同館が廃館したのはツラかった。

これによって必然的に、ヨコハマ映画祭は同館の庇護のもとを離れ、ひとり歩きせねばならぬことになった。

会場探し、映画会社やゲストとの交渉、興業組合との調整など、これまでにない雑多な困難が我々に降りかかってきた。会場は、馬車道の横浜市民ホールを数倍の競争率の難関を突破し

て抽選で引き当てた。

映画館の館主さんたちの集合体である興業組合との調整問題は、これまで映画館を会場としていた時には考えられないほどのネック事項として浮かびあがってきた。我々のような素人集団の映画上映を無条件で認めていたら、映画館の商売に支障をきたすとの観点から、上映希望作品のほとんどにダメが出された。横浜の映画状況を盛りあげていくために大局的な判断を願いたいとする当方の希望は、総論賛成、各論反対という形ではねつけられた。ギリギリまでの調整でなんとか二本だけの上映が認められたがこれまでの四本上映に比べて迫力ないことおびただしい結果となった。

また、上映作品に「狂った果実」というにかつロマンポルノ作品があったため、市民ホールでの上映をめぐる市の内部で賛否の論議を呼んだとの新聞報道がなされたりした。これは、当時の糸川館長の「市民に支持されている立派な催し。ポルノ拒否は時代に逆行する行為。ハイカラではトップをいく横浜市がとるべき態度ではない」とのツルの一声で決着がつけられたと聞き、若者文化の灯が守られたと我々は喝采を叫んだ。

この年の映画祭には色々と思い出がある。過去二回の大入りに気をよくして、PR活動に手

写真一2 高倉健さん



ぬるさがあったためか、一、五〇〇人収容の会場に、約七〇〇人しか動員できず、大赤字を出してしまった。今回こそは収支トントンに、との思惑は見事にはずれ、その赤字分はボクとH君の二人にモロに降りかかってきた。この辺が金銭的に一番苦しい時期だった。

一方、映画祭史上の語り草となる感動的「事件」が起きたりした。この年の特別大賞があの高倉健さん。だが折悪しく授賞式の当日がちょうど「海峡」という映画の北海道ロケと重なってしまい、どうしても出席できないとの健さん側からの丁重なる返事。事情が事情なので諦めざるを得ない。そして当日、授賞式の始まる時間になっても、代理のプロデューサー氏が姿を見せない。アセるスタッフがフト気づくと、舞台隅に健さん御本人がいたのだ！ たまたま撮影の合い間が数時間出来たとのことで、飛行機で駆けつけて下さったのだ。会場にいられる時間はわずか十数分。また空路でトンボ帰りだ。

すぐに舞台に立った健さん、「どうしても横浜の空気を吹いたくて、飛んで来てしまいました」と挨拶、会場を埋めたファンは割れんばかりの拍手でむかえ、スタッフはこみあげてくるものを抑えるのに必死だった。

この年、日本アカデミー賞をはじめ、大手の賞をいくつも取った健さんだったが、わが映画祭を除いてはすべて欠席であった。なぜ、それほどまでに、こんな吹けば飛ぶような小さな映画祭での賞を大事に思ってくれるのであろうか。

この映画祭で受賞された映画人が異口同音に語るのは、身銭を切って映画館に足を運ぶ映画ファンたちが主催する映画賞で選ばれることは専門家が審査するスポンサー付きの大手映画賞などとは、全く別種の大きな喜びがあるということみたいだ。

④ 第四、六回映画祭

第四回目の映画祭は、前回と同じ横浜市民ホールで開催されたが、約一、三〇〇人の観客を集め、収支はようやくトントンにこぎつけた。この頃からヨコハマ映画祭の知名度も、かなり一般に浸透するところとなり、若い市民が作る横浜の名物行事として認知してもらえるところとなってきた、という実感を我々は持った。そして、ここに至り横浜の人々の参加が東京から

のそれを大きく上回るようになってきたことも嬉しい事実であった。

この年の秋には、横浜につかつ劇場とのタイアップで、「ギネスに挑戦！日活映画24時間フィルムマラソン」というイベントを企画、懐しの石原裕次郎、小林旭、吉永小百合など、日活黄金時代の名作一三本を二四時間にわたって連続上映を実施、一五〇人にものぼる完走者を出して話題を集めた。これ以降、毎年同劇場とは

写真一3 第5回ヨコハマ映画祭



写真一4 白都真理さん（「人魚伝説」）



タイプアップして、様々な企画のイベントを組んでいる。

このように映画館と手を携えて、ハマの映画状況を活性化する一端を担うことも、我々の役割だと思っている。

こうして地歩が固まったかに見えたヨコハマ映画祭だが、次の五十九年の第五回目は、これまで使用していた市民ホールが新築のため取り壊されることとなり、またしても我々は会場探しに奔走することとなる。それでも神奈川県立青少年センターをなんとか確保することが出来

た。

この年はこれまでで、最高の人気で前日から徹夜組はできるわ、はるばる九州や関西からの駆けつけ組はいるわで、超満員の会場は終日、映画ファンの熱気に包まれた。

そして今年の二月に開催された六回目の映画祭。またしても前回の会場が改装のため使用できなくなり、会場探しに苦戦を強いられながらも、県立音楽堂を借りることが出来た。

今回も、「人魚伝説」という横浜初公開の作品を含めて、三作品の上映、伊丹十三氏のV2達成で沸いた表彰式など、華やかな「おまつり」となったようだ。

四——おわりに

我々は今、来年二月に予定されている第七回目の映画祭めざして、準備に追われているが、またまた会場探しに苦慮している。このイベントにふさわしいスケールの公共のホールがすべて使用不可なのだ。

全く映画祭以前にシンドイことが多すぎるの

だが、この種の困難はいつもつきものだ。公共のホールが借りられぬのなら、今回は大赤字覚悟で小さな映画館にて開催しようと腹を決めているところだ。（大きな館はとも開放してくれない）

万難を排してこの映画祭を存続させていくこと、それがこの映画祭をここまで育てて下さった市民や映画人の方々に、せめてもの我々の報いる道だと思っている。

日本ほど「文化としての映画」の地位の低い国はない。欧米の諸外国ではこの貴重な文化を保護・育成して次の世代へ確実に伝えるために、政治や行政がらみで深い配慮が施されている。素晴らしい映画は、全世界の人々の貴重な財産だと考えられているのだ。それがなされない国に住むボクたちは、自分たちの手でこれを守る行動をせねばならないのだ。

我々は、若い市民の力で映画祭のひとつぐらいできず何が大都市だ、という気概をもって、今日も映画祭のために奔走している。

△ヨコハマ映画祭実行委員会代表▽